Ａ－１　学校研究

１　本校の実態

本校は、金沢の中心部にあり、そして地域の中心部に学校がある。明治５年に学制が敷かれた折「壱番小学校」と命名された所以である。地域は、加賀藩の仏具や和菓子、加賀友禅などの文化を創出し、加賀藩の産業を支えてきた。今も校下には、古きよき伝統文化が息づき、今日にまで伝承されている。また、決して広いとは言えない校下には、平安から鎌倉時代の全宗派５２ヶ寺という他に例をみない地域でもある。地域には、地域の宝である子どもを学校とともに育てようとする気風が根づき、住民は、温かいまなざしで子ども達の成長を見守り続けている。

このような地域環境にあって、子ども達は、褒めれば力を発揮する、注意すれば改めるなど、素直な子が多い。反面、人頼りの姿勢、自ら進んで考えて行動するという主体性・積極性に欠けたり、基礎的・基本的な知識・技能（以下、基礎学力という。）の習得状況に個人差も見られる。

本校の学力等の課題は、全国学力・学習状況調査結果及び学校評価結果分析から、次のことが言える。

(1)　基礎学力の習得状況に個人差があり、しかもその差は大きい。
(2)　自分の考えを相手に伝えたり、友達の考えを受けたりして、互いにつなぎながら学び合ったり、高め合ったりしていく関わり合いの学習が成立しにくい。
(3)　文章で表現する力や読解を伴う記述する力が不足している。
(4)　予想や仮説に基づいて推論する問題解決能力が不十分である。

以上の課題等を洗い出し、その解決策を整理したのが下表である。

	課　　題	考えられる手だて等
基礎学力に関すること	・習得に個人差が大きい ・学び方を知らない	・基礎学力の徹底を図る ・宿題を徹底する
表現力に関すること	・言語表現能力が稚拙 ・語彙力が不足 ・読み取りが弱い ・書くことが苦手	・「話型表」を活用する ・語彙を増やす ・辞書を活用する ・読書活動を推進・奨励する ・グラフ等の読み方を指導する ・ノートの書き方、メモの取り方等を指導する ・作文、感想文等を多く書かせる
思考力・判断力等に関すること	・思考力・判断力が不十分 ・課題発見能力が不足 ・客観読み、事実読みに慣れていない	・問題解決型の授業を念頭にメリハリのある授業を展開する ・体験的活動や操作活動を授業に取り込む ・事実と考えを区別したノートづくりを指導する

２　研究主題

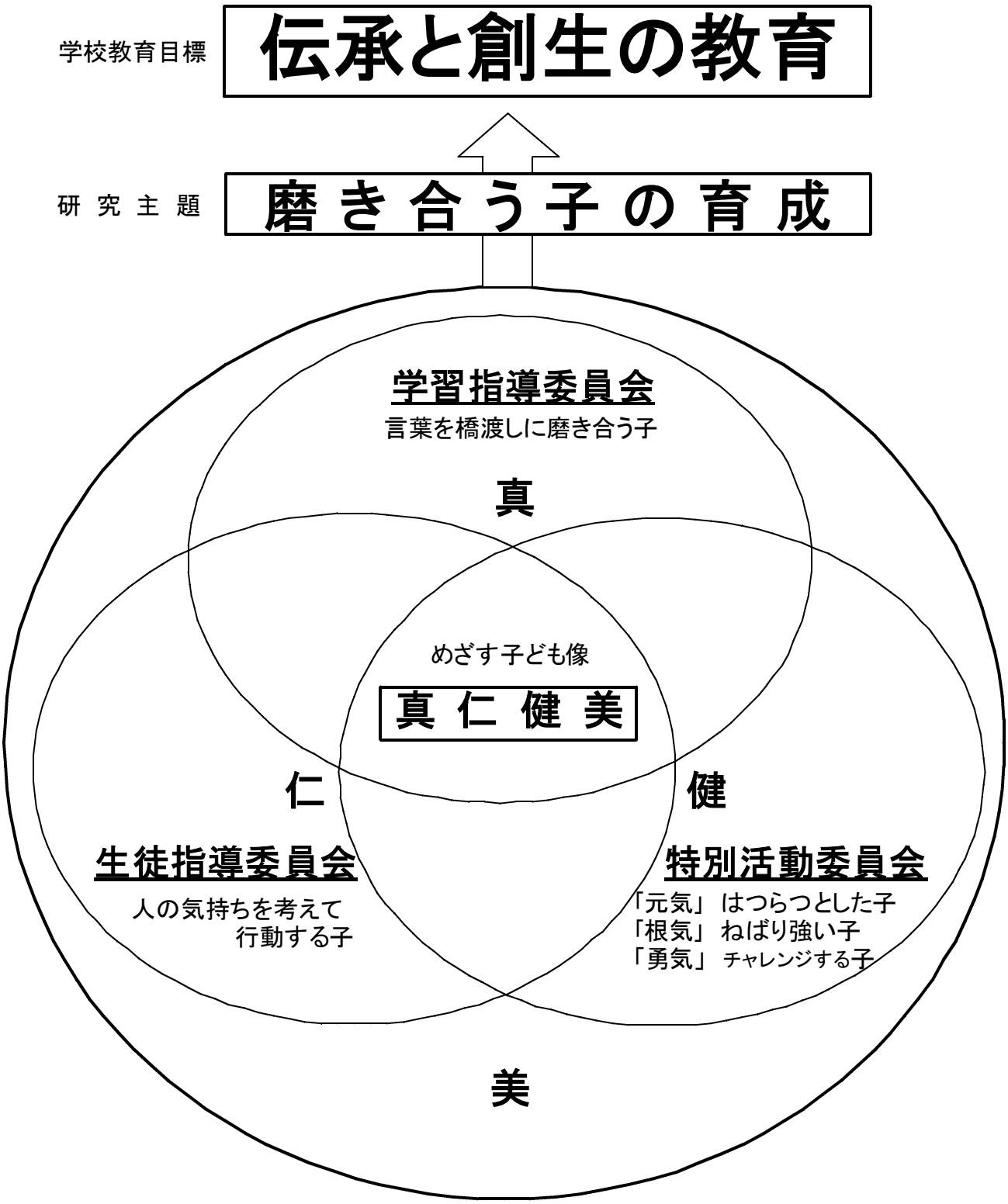
本校では、校下の伝統、学校の校風及び本校で蓄積された教育課程を今現在に継承し、そして未来につなぐため、学校教育目標に「伝承と創生の教育」を掲げた。

また、人が修めるべく価値を「真」「仁」「健」「美」とし、その４価値を教師と子どもがともにめざすこととした。

これらを受け、学び合い、高め合い、深め合う最高位の姿を「磨く」とし、研究主題を「磨き合う子の育成」とした。

３　研究組織

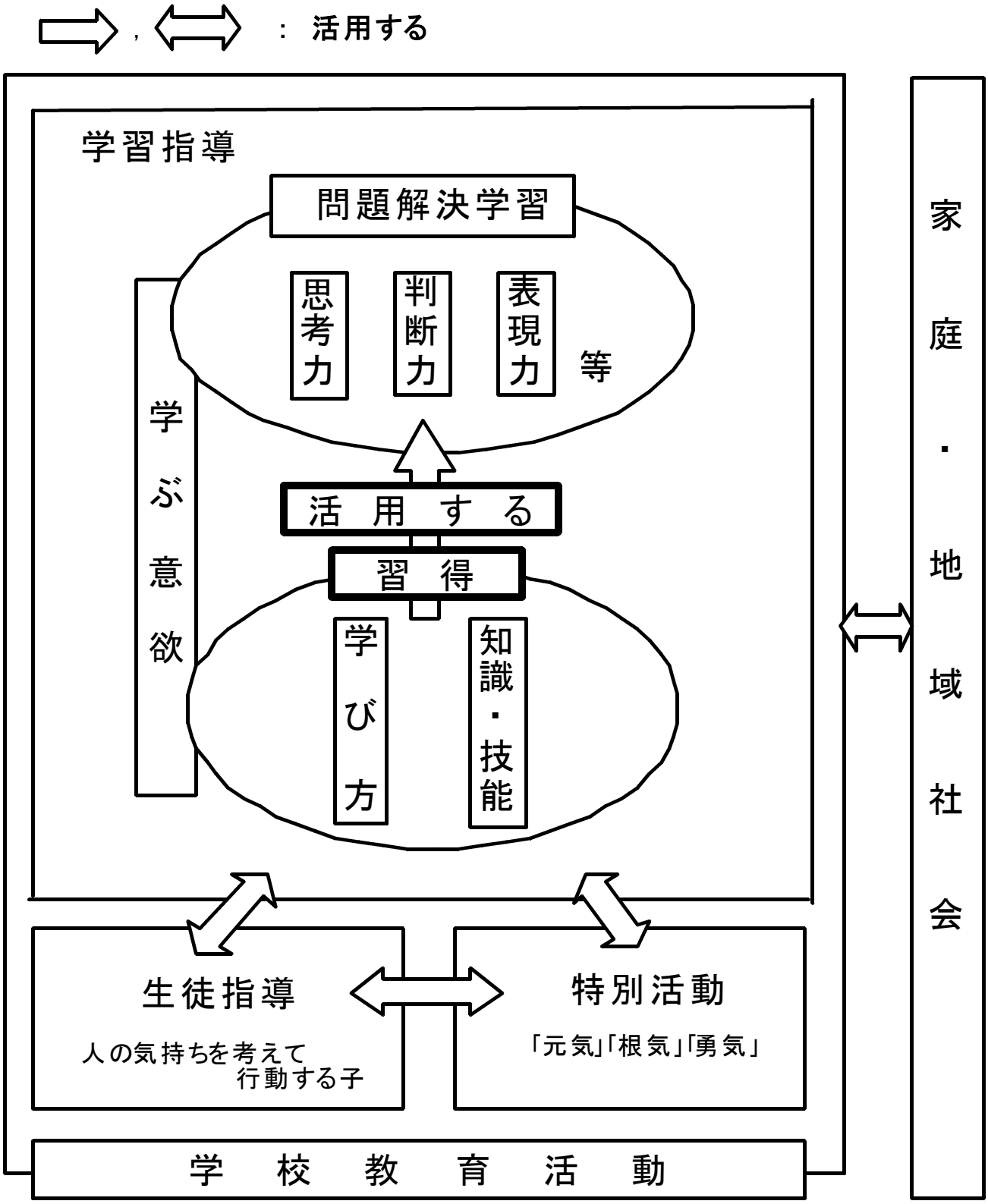
研究主題を具現化し、子どもを体系的に育成するため、三委員会からアプローチする。



４　「活用する」の捉え

平成２０年度本モデル事業では、学習指導委員会を中心に紹介する。

本校では「活用する」を「基礎学力を習得し、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の能力を育むこと」と捉えている。基礎学力が次時の学習や学校生活の場で活かされたり、家庭や地域の場で言動や表情に現れた時に「活用された」と捉らえる。



５　研究計画

「磨き合う子」を育成するため、本校では各教科等を焦点化して年次ごと計画的に教育課程を編成・改訂し続ける。

<table>
<tr><td rowspan="2">年　度</td><td colspan="3">金沢・野町スタンダード編成計画</td></tr>
<tr><td>窓　口</td><td colspan="2">その他</td></tr>
<tr><td>Ｈ２０年度</td><td>国語科「野町スタンダード」を構築</td><td rowspan="3">算数科「野町スタンダード」を構築（適宜、音楽科、図工科、体育科等の教科及び道徳等を見直す）</td><td rowspan="2">地域と人を活かし生かされていることを知る　生活科、総合的な学習を構築</td></tr>
<tr><td>Ｈ２１年度</td><td>理科「野町スタンダード」を構築</td></tr>
<tr><td>Ｈ２２年度</td><td>社会科「野町スタンダード」を構築</td><td>生活科・総合的な学習の時間の再構築を図る</td></tr>
<tr><td>Ｈ２３年度
↓</td><td colspan="3">Ｈ２３年度以降は、同サイクルで教育課程の見直しをかけ、再構築を図る</td></tr>
</table>

６　研究の内容

以下研究の具体的内容及び取り組みをあげる。

(1)　基礎学力に関すること

①　「野町習熟タイム」の充実

基礎学力の定着を図るため、「野町習熟タイム」を充実する。

ア　時　間　朝の８時１５分から８時３５分　２０分間

イ　体　制　担任と校長、教頭、級外が関わる複数体制

取組例

・Ｈ１９、Ｈ２０学力テストの分析をもとに、何ができて何ができないのか、一人一人の子どもの実態を把握する。

・学期ごとに、学習の習熟度や取り組み方について評価する。指導法や進捗状況についても評価しながら、その改善を図る。

・一人一人の子どもの進捗状況は、個人カードに記録させ、担任が把握する。
単元末には、個人カードの記録やテストの結果をもとに評価し、短いスパンで、本人の努力を認めたり、励ましたりする。

・計算については、制限時間によって「習熟」「熟練」「熟達」を設けて、１２月、３月に成績優秀者を褒め、全校朝礼で学校長より認定証を渡す。

・その他、詩の朗読・暗誦を通して言語能力を育成する。

②　「放課後学習教室」の実施

「野町習熟タイム」等においても習得できない子どもについては、さらに月・水・金曜日に「放課後学習教室」を実施する。

ア　時間等　低学年　～１５：４５　中・高学年　～１６：３０

イ　教科等　体育を除く全ての教科等

ウ　方　法　学級担任による子ども認定・選考と保護者の承諾

エ　体　制　管理職、少人数担当、保護者・学生ボランティア

取組例

・　毎月月末に、定着度を計るテストを行い、基準を満たすとき修了とみなす。

③　「家庭学習」の取組

学習習慣を確立し、教科等学習の子どもの積極的な参画を促すため、保護者啓発も含め「家庭学習」への取り組みを強化する。

取組例
・家庭学習（最低１５分×学年）の習慣化を図る。
・毎日の漢字・音読・計算で復習を中心とする。
・頑張っている姿を教師、親が激励する。

(2) 表現力に関すること

① 「話型表」の活用

学びの中から児童が発する磨き合う活きた話型等を話型表に掲げ表現力（コミュニケーション力）をつける。

取組例
・表現力の育成はまずは型からはじめる。
・子どもが使った独り言やつぶやき等を話型表に載せ、逐次更新する。

② 語彙力の育成

取組例
・国語辞典や漢和辞典を発達段階に即した系統的な指導目標を設定し、全校で取り組む。
・他教科の学習にも国語辞典や漢和辞典を常備させる。

③ 語彙や豊かな表現力の育成

語彙を増やし、コミュニケーション力を高めるため、以下の取り組みを行う。

取組例
・「マイ・ブック・バッグ」を机横配備する。
・給食、授業時間の隙間時間による読書活動を取り入れる。
・名文・古文の等の暗誦を野町タイムに導入する。
・教科において、重点的にグラフの読み取り指導を行う。

④ 「学びノート」「レポート」の指導

生きたノート、活かされたレポートを作成できるようにするため、書き方等を指導する。

(3) 思考力・判断力等に関すること

① 「メリハリのある授業」の実施

習得した基礎学力を活用して、課題発見能力、思考力・判断力、問題解決能力等を育成するため、問題解決学習を展開する。

取組例
・週案に評価規準の４観点を明記する。
・評価規準の４観点を踏まえた「メリハリのある授業」について協議・研修する。
・板書案の作成に基づく授業展開を行う。

② 「ぶらり参観」の実施

教師の授業力及び指導力を向上させるため、互いに授業を見合う「ぶらり参観」を実施する。

取組例
・職員室に週案を掲示し、いつでも参観できる体制を整える。
・授業評価観点表明示のもと、管理職等による月１回の授業参観・面談を行う。

③ 「かけこみ相談室」の実施

授業等の悩み、校外研修の還元等、自主研修を実施する。

取組例
・職員室に内容等を記入・掲示できるようにする。

・内容は、学習問題、発問、板書、児童理解、教材の悩みごと等とする。

７　その他の取組

実力テストの実施

子どもの学力の伸び具合並びに傾向を把握するため、実力テストを実施。

ア　時　期　１２月

イ　教科等　国語、社会、算数、理科の４教科

取組例

・４月に「教研式コンピュータシステム教育・心理検査」を実施する。

・夏季休業７月に３者面談を開催し、学力等について確認し合う。

・１月に実力テスト結果をもとに、１月の保護者面談資料に活用する。

８　成果の普及に関する取組

(1)　公開研究発表会の開催

平成２０年　１１月２１日（水）　午前８時　～　勤務時間修了

(2)　フリー参観の実施

学校便りを全戸（１９００戸）配布するとともに、毎日が公開「フリー参観」を実施する。

(3)　報告書の作成

研究成果については、三委員会の取り組みも含めて主だったところに発信する。

(4)　その他　研究経過・成果のインターネットによる公開

インターネット「金沢市立野町小学校」「ほぼにち」にて研究経過及び成果を公開していく。

９　これまでの歩みと成果

(1)　一人学習の仕方

学び方を教え、それを習得して自分の力で学習を進められるよう、一人学習のあり方を検討・実践した。発達段階に応じて説明文と物語文の一人学習の仕方を全体で共通理解し、学年が変わっても、教師が変わっても同じ学び方を行う。

(2)　ノートの書き方

思考を深め、学び方を次時に活用できるようにするためには、ノート指導が鍵を握ると考えた。そこで、どの学年、どの教科にも共通して使えるようなノート指導を全校で取り組んだ。

(3)　話型

互いに磨き合う子を育成するためには、自分達の考えを言葉で表出する言葉と言葉のキャッチボールが必要であると考えた。話型は単なる型ではあるが、大切な磨き合う手段と捉え、子ども達が授業で発する言葉を教師が鋭くキャッチし、話型として教室前面に位置づけるようにした。

(4)　研究授業（国語）から見えてきたこと

説明文における習得することや活用する場面が明確になってきた。全学年における系統性が見え、それを意識して授業を進めるようになってきた。

(5)　広見通信

事前研で話し合われたことや研究授業を参観するにあたっての参観視点や授業整理会ではっきりしたことをまとめたもの。これによって職員全体の共通理解が図られ、次回の

研究授業での課題が明確になった。そして、研究の積み重ねがされていった。

(6) **ぶらり参観**

教師が他の教師の授業を参観し、互いに磨き合う場を設けた。困った点もぶらり参観で教えてもらえる利点がある。

児童が他のクラスを参観することで、目指す授業像がはっきりしたり、参観される側もより頑張ろうという意欲付けになった。

(7) **事前の模擬授業**

本時の問題点や板書の効果的な仕方、切り返しの仕方などを互いに教え合った。教師の授業力向上が図られ、事後研の話し合いが深まっていった。

(8) **かけこみ野町塾**

授業でうまくいかなかった点を再度検証し、次時はどう手立てを打っていけば子どもに力が付けられたのかを話し合った。悩んでいた教師自身が元気になるよい機会となった。